

平成二十一年度 第五十五回山形地区高校演劇合同発表会
山形県立山形西高等学校演劇部 上演台本（第4稿）

平成二十一年九月十三日（日） 於、山形市民会館

上演（12）『こぶたとチャールストン』 作、佐藤 俊一

時 現在に限りなく近い近未来
所 日本のどこか

登場人物

少年 1（生徒）
少女 1（人顔のまま生まれた）
少女 2（幼稚園児、生徒）
少女 3（幼稚園児、生徒）
少年 2（幼稚園児、生徒）
先生
母たち
子供たち
その他（聴衆・大人たち）
・
・
・
・
・
・
・
・
・

プロローグ

音楽とともに幕上がる。

S E、産声

赤ちゃんを抱いた新産婦登場。

S E、産声の中に子ブタの鳴き声が混じってくる。

母 1 (黙って赤ちゃんの顔を見せる。) どう見えます？ 私にはブタにしか見えませ

ん……。何で私の子どもがブタなの！ どうしよう……。)

母 2 (同じくブタ顔の赤ちゃんを抱いて、照明の中に登場。) こんなことってあるの？
一体誰に似たの？ 何が悪かったの？

母 3 (同じく) なんてこと……。でも、育てるわ。私。

母 4 (同じく) ブタのどこが悪いのよ。みんなブタ顔で生まれてるじゃない。

母 5 (同じく) かわいいじゃない。みんな同じブタだし。

さらに数人の母が同様に登場して賑やかになる。
人顔で生まれた赤ちゃんの母親、安心した顔で登場するが、周囲の雰囲気、こ
っそり退場する。

母たち　子ブタ、ばんざーい！　ばんざーい！　ばんざーい！

ひとしきり盛り上がって、全員退場。

1 場

教団指導者登場。指導者の演説中に聴衆が増えていく。

指導者

神はお怒りです！

神は、自らのお姿に似せて人をお作りになりました。決して、ブタに似せてお作りになったのではありません。なのに、なぜ、今子供たちはブタの顔をして生まれてくるのでしょうか？

神はお怒りです！

神は、罪深い私たちをお見捨てになろうとしているのです。そうです。世界の終わりが近づいたのです。

聴衆 1

神はお怒りなのですね。

聴衆 2

もう、普通の人間は生まれないのですか？

聴衆 3

この世がブタだけの世界になれば、それはそれで普通になるのではないですか？

指導者　そうですね。確かにこの世はブタの世界になってしまっていますね。このまま放っておけば…。

聴衆 4　放っておけば？

ブタ顔の赤ちゃんを抱いた母親登場

指導者　私たちは神の子羊にとえられます。決してブタではないのです。神の子である私たちがみんなブタになってしまったら、神は私たちをお見捨てになるでしょう。さあ、私たちは神の御心を取り戻すために何をするべきでしょうか？

聴衆 1　何をすればいいのでしょうか？

指導者　それは、みなさんが自分で考えなければなりません。さあ、神の御心を取り戻し、世界の破滅を救うのです！

聴衆 2　何でもします。世界を救うためなら！

聴衆 3　ブタがいなくなればいいのですね？

聴衆 4 そうだ。ブタがいなくなればいいんだ。

聴衆 1 ブタをこの世から消すんだ。

聴衆盛り上がる中、母子、雰囲気におびえて逃げ出そうとする。

聴衆 2 ブタだ！

聴衆 3 ブタをつかまえろ！

母親 やめてください！ この子はブタじゃありません、人間です！

聴衆たち ブタだ！ その鼻はブタだ！

母親 この子がどんな顔に生まれようとこの子に罪はないでしょう！

この子を産んだのは私なんだから、気に入らなければ私を殴りなさい！

聴衆 そうだな、お前もブタなんか産んで！ ブタを消せー！

母親 やめてー！

聴衆の攻撃を受けながら、母子は逃げ去る。指導者も退場。
やがて、母子だけが再び登場。

通行人 どうしました？ だいじょうぶですか？

母親 ブタを消せって…。

通行人 最近幅を利かせてる暴力教団ね！

母親 この子は何もしないのに…、ただ生きていたいただけなのに。…生きていくために
生まれたんですもの。
この子を、どうか、お願いします。ぐふっ。ばたっ。

通行人 あっ！ しっかりして！ 死んじゃだめー！ …死んだわ。
…この子は私が育てます。安心してください。

暗転

2 場

幼稚園の先生登場

先生　ねえ、聞いてよー。最近のさ、子どもってみんなブタの顔してるじゃない。みんなのよ、みんな。みんなブタ顔。私もさー、ブタの飼育するために幼稚園の先生になったわけじゃないからねー。考えちゃうよねー。

園児たち登場。皆、ブタ顔である。

園児たち　先生、おはよーございます。ブー。

先生　おはよー。今日もみんな元気だねー。でもそのブーはやめたほうがいいかなー。

園児1　先生、わたしたち、ブーって言うのが好きなんです。ブー。

園児2　先生、先生もブーって言って。ブー。

園児3　言って。言って。ブー。

先生　先生はね。ブタじゃないんだから、ブーって言わないのよ。みんなも、顔はブタでも、中身は人間なんだから、ちゃんと人間らしくしましょうね。でないと、みんなトンカツにされちゃうぞー。

園児たち　先生こわーい。

先生　　ははは、冗談よ。：冗談だってば。ほら、恐がらなくていいから。こっち来なさいよ。：来てよ。：ブー。

園児たち　ブー！（喜び）

先生　　さあ、今日も楽しく遊ぼうねー。

園児たち　：。（不満と期待）

先生　　：ブー。

園児たち　ブー！（喜び　走って退場）

先生　　走っちゃダメよ。危ないから。あーあ、聞いちゃいない。：いつまでこんなことやっつてんのかしら、私。結婚しちゃおうかな。でも、生まれてくる我が子もブタかー。何かやだブー。：あれ？　これやばいんじゃない？　癖になるブー。やだブー。やだーブー。

先生退場

3 場

ブタ教団の指導者（ブタ顔）登場。

指導者

古い神は死んだのです。私たちは、新しい神から、新しい顔を授かりました。

熱心に聞いているブタ顔の子どもと母親たち。

指導者

この耳、この鼻。これこそが新しい人類のしるしであります。

世界の人々が、これまでの人種や民族、国境を越えて一斉に変化した。これが神の仕業でなくて何でしょう。

母親 1

でも、まだ、私たちは認められていません。私たちを迫害する人たちもいます。

指導者

あなたたちの子どもは、神に選ばれた初めての子どもたち。新人類なのです。

新人類は、旧人類よりも鋭敏な嗅覚と聴覚で、より深い感性に基づいた文化を築いて行くでしょう。人類の文明は、大きな変化を遂げる転換点に向かっているのです。

だから、あなたがたは新人類を生み出した母として、我が子を誇りに思いこそしても、何も後ろめたい思いをすることはないのです。

母親たち安心する。

指導者　しかし、この新しい神の時代に、今なお人顔で生まれてくるものがあります。

母親2　人顔の子を見ると、うらやましいなって思っていました。

指導者　いいえ、人顔の子どもこそ、消え去るべき旧人類であり、存在してはならないもののなのです。

母親3　人顔の子どもこそ、消え去るものなんですね。

指導者　そうです。でも、私たちは人顔の子どもを消そうなんて考えません。そんなことをしなくても、彼らは自然に消えていくのですから。

母親1　私たちの子ども、どんどん大きくなって、みんなが嫌でも認めるようになっていきますね！

指導者　そうです。すべては神のご意志なのです。讃えよ、新しい神を！　栄あれ、新人類よ！

みんなが歓喜。

母親 2 すみません。失礼ですが、あなたの、その鼻は？

指導者 あ、これですか？ これは、（鼻を取り外す）看板のようなものですよ。

指導者、母親、子どもたち退場。

4 場

小学校。登校してくる生徒たち。みなブタ顔である。
各自、机と椅子を持って出て来る。（生徒 4 は持ってこない。）

生徒 1 おはブー。

生徒 2 おはブー。ねえ、聞いた？

生徒 1 何？

生徒 2 ミオさ、美少女コンテストに出たんだって！

生徒 1 へー。

生徒 2 そんなで、2 次審査通ったんだって！

生徒 1 へー！ すごいじゃんそれ。

生徒 3 美少女コンテストってー、ブタ顔になって初めてなんだよねー。

生徒 2 ブタ顔の、初代、国民的美少女ってわけ。

生徒 1 ミオってさ、耳立っててヨークシャー顔だよね。やっぱ、美人系はヨークシャー顔だよね。私なんて耳寝で、体も胴長で、ランドレース系だもんね。

生徒 3 私なんかデュロック系じゃん、色白じゃないし、顔はいまいちだよね。

生徒 2 けどさー、バークシャーの黒豚とかー、あの梅山豚系めいしやんとんなんか最悪だよね。

生徒 1 梅山豚めいしやんとん、最悪だよね。黒くて、皺くちやで、耳超でかくて。はじめて見たとき、象かと思ったし。

生徒 3 鼻の短い象ー、てか。

梅山豚系の顔の生徒登場

生徒 4 おはブー。

生徒 1 来た来た。梅山豚。

生徒 4 なに？

生徒 3 梅山豚。

生徒 4 私のこと？

生徒 1 いいよねー、梅山豚。頑丈で多産系だし。

生徒 4 もしかして、馬鹿にしてる？

生徒 1 3 してないよー、あはは。

生徒 2 でもさー、大体、三元豚じゃん、みんな。なんとか系っても、純粋種なんて珍しいし。

先生、入ってくる。

先生　　おはよーございます。

生徒たち　先生、おはブーございます。

先生　　だから、おはブーじゃなくて、おはよー。言ってごらんなさい。はい。

生徒たち　おはブー！

先生　　（ため息）（だめね。顔がブタだと心もブタになるんだわ。）

ほら、ちゃんと前を向いて。話をしないの。何回言ったら分かるの？

（ブタは人の3倍手間がかかるわね。）

じゃあ、宿題を出しましょう。あら、また忘れたの！　（やっぱりブタはダメね
ー。日本の将来は暗いわ。）

（忘れ物の罰を与えて）ブタにはこれがお似合いよ。ブタはブタらしくしなさい。

生徒1　先生、またタバコ吸ったでしょ、トイレで。

先生　　しませんよそんなこと。

生徒2　先生、何かだんなさんと違う男の人の匂いするー。

先生　　な、何言ってるの。

生徒3　　私たち、鼻が利くのよー。

生徒2　　不倫だ不倫。

生徒たち　ふーりーん。ふーりーん。ブーりーん。

先生　　ば、ばか！　ブーブーうるさいわね！（このブタどもが）。

生徒1　　ブタですが、何か？　私たち、耳も利くのよ。

生徒3　　ブタを差別しないでくださーい。

生徒2　　先生！　私たち、「新人類」なのよ！　先生たちみたいな「旧人類」とは違うの！
今に私たちが大人になったら、先生たちは老人になって、絶滅していくのよ。

先生　　新人類って、あんたたち、何様のつもり？

生徒たち　　私たちは新人類！　きたるべき未来は私たちのもの！

子ブタたち、音楽（５ひきのこぶたとチャールストン）に合わせて歓喜の踊り。
先生退場。踊り終わって、子ブタたち退場。

5 場

子連れの母親たち通りかかる。

母親 1 あの家の子、ブタ顔じゃないんですって。

母親 2 えー。今どき人顔なの？ 旧人類なのね。その子のお母さん、私たちみたいに新人類を産めなかったのねー。

家の中から、人顔の女の子が登場。母親たち黙る。

少年 1 （女の子に気づく）あ。

少年 2 あー旧人類だ！ 旧人類ー。やーい。

少年 2、石を拾って、女の子にぶつける。女の子泣く。母親たち黙ってみている。
少年 1、少年 2 を止めようとする。

鳴き声を聞いて家の中から少女 1 の母親が出て来る。

母親 3 何するの！ やめなさい！ （少年を叱る）

母親 1 何すんのよ！

母親 3 あなたの子が、家の子に石を投げたからじゃないですか。

母親 2 その顔で他人様ひとさまの前に出て来るのが間違いでしょ。

母親 1 そうよ。旧人類のくせに、新人類を怒鳴りつけるなんて。

母親 3 新人類がそんなにえらいんですか？ ほんの少し前までは、あなたたちの子どもの方が化け物扱いされてたのを忘れたの？

母親 1 忘れたわそんなもの。今はそっちが化け物なのよ。ば・け・も・の。

母親 2 どこかに行きなさいよ。目障りだから。

母親 3 わからない人たちね。どこにしようとするの勝手です！（家に入る）

母親たちぶつぶつ言いながら退場。石を投げなかった少年1、一人残っている。少女1がブタ鼻と耳を着けて出て来る。少年1隠れてしばらく見ているが、姿を

現して声をかけようとする。

少年 1 あの。

少女 1 （！ 逃げようとする）

少年 1 待って！ 待ってよ。何もしないから。君、その鼻……。作り物だよね……。

少女 1 違うわ！ 見ないで！ かまわないで。

少年 1 人顔のこどもって初めて見た。学校にいる子はみんなブタ鼻だよ。君、学校に来てる？

少女 1 私、学校に行ったことないの。ずっと家にいて、お母さんたちと暮らしているの。

少年 1 一人でいても、つままないでしょ。

少女 1 つまんないけど、慣れちゃったわ。

少年 1 ごめんね。石ぶついたりして。あ、いや、僕は投げてないけど、あの子僕の友達なんだ。それに、投げるの止めなかったんだから同じだ。

少女 1　いつものことよ。石ぶつけられるのなんか。こんな顔してるんだから、しょうがないのよ。

少年 1　そんなことない。人顔って、意外と可愛いよ。

少女 1　ええ？

少年 1　僕、お母さんの子どもの頃の写真見たことあるんだ。君、何か、似てるんだよ。

少女 1　そうなの。

少年 1　その写真に写ってる子どもたちはみんな人顔で、でも全然変じゃなくて。どっちかって言ったら、僕の顔の方が変だよ。

だって動物の子どもはみんな親と同じ顔してるじゃない。人の子どもがブタなんて、おかしいよ。

途中から少女 1 の母親が登場し、二人を見ている。

母親 3　ノゾミ、入りなさい。

少女1、中に入る。

母親3

（少年1に）あなた、他の子どもと違うのね。ううん、あなたは間違っていない。でも覚えておいて、正しいことが世の中で認められないこともあるって。

母、屋内に去る。少年1、未練を残して去る。

6 場

食堂。ブタ顔の少女たちがトンカツ定食を食べている。人顔の大人たちもいる。

大人1

ブタが多くなっただな。

大人2

世界中ブタだらけだもんな。

大人1

イスラム教の国は大変らしいな。インドネシアなんかじゃ、味の素に豚のエキ스가入ってたって大騒ぎしたくらいだから、自分の子どもがブタになったら、さぞショックだろう。

大人2

アメリカなんかでも、黒人の子が白豚で、白人の子が黒豚ってのも多いらしい。

大人1

黒人を差別する白人の子どもが黒豚だったら、皮肉だよな。

大人 2　　そういう親は自殺したり、子どもを殺したりするらしい。

大人 1　　世も末だなー。

少女 2　　おいしいブヒー。やっぱり肉よねー。

少女 3　　ここのトンカツ定食、おいしいんだブヒー。ここ、平牧三元豚の肉だから。

大人 1　　あいつらだけは、「我が世の春」って勢いだな。

昔さ、スーパ－の肉売り場に、豚がトンカツ食べてる絵が描いてあってさー。

大人 2　　あー、あったね、そんなの。

大人 1　　ちょっとグロいなーって思ったりしたんだけどー、まさか本当にこんな場面に出

くわすなんて思わなかったよ。

大人 2　　ほんとだ。ブタの共食いか…。

少女 2　　キャベツお代わりー。（お代わりをもらいに行く）

少女 3 私もキャベツブヒー。(お代わりをもらいに行く)

大人 1 俺もキャベツお代わりしてこよう。

大人 2 え？ みんな行っちゃうの？ ま、待ってくれよ。

全員退場。次の場面の間に食堂が撤去される。

7 場

ブタ顔の中学生 1、2 登場。

生徒 1 カエルの子はカエル。：キリンの子はキリン。

生徒 2 は？

生徒 1 キリンの子は親に似てやっぱり首が長い。でも、なぜキリンは首が長いのかって考えると、どうなんだろう。

生徒 2 どうって：高い枝の葉っぱが食べられるでしょ。

生徒 1 子どものキリンじゃ、首長くてもそこまで届かないでしょ。赤ちゃんキリンはお

母さんのおっぱい飲むんだから、おっぱいまで届けばいいわけじゃない。

生徒 2 じゃ、何？ 生まれたときは首短くて、成長しながら伸びればいいってことにゆーって。

生徒 1 あはは、首の短いキリンっておかしいね。動物ってさ、親と同じ形で生まれてくるじゃない？ 私たちは、なんで親と違うんだろう？ 昔、ブタ顔の人間って想像できた人いるかな？ もしいたら、笑っちゃったよね、きつと。

生徒 2 実際笑われたじゃない、ちっちゃいころ。でも、これは、突然変異による進化で、私たちの子どもは私たちと同じ顔になるって教わったでしょ。そうなれば、親と子どもは同じ顔で、問題なし。

生徒 1 私たちの世代だけ、親子で断絶してるのね。これって不幸じゃない？

生徒 2 選ばれた世代なんだから仕方ないって。進化できないよりはいいよ。進化し損なうって人顔で生まれた子どもは、施設に隔離されることになったじゃない。この一年間で百人くらい収容したってよ。

生徒 1 そうそう、入ったら最後、一生出て来れないんだってね。

生徒 2 そう、それから施設の中でしか結婚できなくて、子どもも産めないんだって。

生徒 1 嫌だろ。なんか「強、制、収、容、所」って感じる。

生徒 2 だから捕まりたくなくて逃げたり隠れたりするらしいよ。

生徒 1 この辺で人顔の子なんて見たことないけどね。

生徒 2 そりゃ、街中に出て来るときは、作り物の「鼻」と「耳」をつけてくるの。

生徒 1 え、まさかあんたの鼻？

生徒 2 痛い！ 何すんだよばかー。

などと話しながら中学生、退場。

8 場

少年 2 登場

乳母の声 おぼっちゃまー。どこですかー。もう帰る時間ですよー。

少年 1 の声 おーい。もう出て来いよー。

少年 2、様子を窺っている。ポケットからタバコを取り出し一服しようとする。
不意に少女 1 が登場。少年 2、少女 1 に気づき、身を隠す。
少女 1 は、辺りに誰もいないと思ったか、ブタ鼻をはずす。

少年 2 (タバコをしまい、とびだす) おい！

少女 1 ！

少年 2 おまえ！ 旧人類だな！

少女 1、作り物の鼻をつけ、逃げようとする。少年 2 は、少女 1 の手の鼻を奪い取り、捨てる。

少年 2 やっぱりそうだ。

少女 1 見逃してください。どうか、他の人には言わないで。お願い。…お母さんに、外ではずしたらいけないって、あんなに言われてたのに…。

少年 2 いや、保健所に届ける。旧人類は隔離しておかないと。こんな所に隠れているな

んて、旧人類はこれだから油断できない。

少女 1 旧人類って、何なの？

少年 2 お前たちみたいな不細工な顔の持ち主のことだよ。

少女 1 あなたのお母さんはどんな顔をしてたの？ 豚の鼻をしていたの？ そうじゃないでしょ。

少年 1 もちろんだ。僕たちは新人類第一世代なんだから、僕らの親は旧人類だ。だから顔が違うのはあたりまえだ。でも、やがて第二世代が出て来るよ。そうして、旧人類は絶滅する。

少女 1 消えていくものなら、そつとしておいて。

少年 2 おまえみたいなできそこないが、またできそこないを産んだりしたら困るじゃないか。

少年 2、少女 1 を無理やり連れて行こうとする。少女 1 抵抗する。
少年 1 登場

少年 1 やめろよ。

少年 2 え？ 何だって。

少年 1 見逃してやれよ。

少年 2 何言ってるんだよ。旧人類の子どもじゃないか。保健所に届けて登録しないと。

少年 1 嫌がってるじゃないか。

少年 2 決まりを守らないつもりか？

少年 1 決まりを守らないのは、君も同じだろ？

少年 2 何？

少年 1 「タバコは二十歳^{はたち}になってから」だろ？

少年 2 んん？

少年 1 あの厳しい家庭教師の先生に知られても良いのかな？

乳母の声　（おぼっちゃまー。お勉強の時間に遅れてしまいますよー。）

少年 2　ちえっ！　覚えてろよ。

少年 2、退場。

少年 1　前に逢ったよね。あいつが君に石をぶつけた時。

少女 1　私も覚えてるわ。

少年 1　そう。

少女 1　あなた言ったわ、私があなたのお母さんに似てるって。

少年 1　ああ。

少女 1　あなたのお母さんって、どんな人？

少年 1　僕を産んだ母さんは、僕を産んですぐに死んじゃった。

少女 1 そう…。

少年 1 そのころは、狂信的なグループがブタ顔の赤ちゃんを殺しまわってた。知ってるだろ？ 母さんが守ってくれなかったら、僕も死んでたよ。

少女 1 まさか、お母さん…。

少年 1 うん。奴らにやられた。

少女 1 かわいそうに。

少年 1 僕は、奴らが憎い。

少女 1 やっぱり、旧人類が憎いのね。

少年 1 ちょっと違うかな。奴らってのは、旧人類とか新人類とか、人を勝手に区分けして、相手は殺してもいい敵なんだって思いこませる奴らだよ。

少女 1 …そんなふうに考えたことなかった。

少年 1 いつも君といっしょにいたいな。あんな奴のいる学校なんか、行かなくていいし、

行きたくもない。

少女 1 私もあなたといたい。でも、二人の顔が違う限り無理だわ。人とブタはいっしょになれないのよ。：私がブタになれたらいいのに。

少年 1 君は、今のままでいて。僕が何とか考えるから。また明日来るよ。

少女 1 気をつけて：。

S E 短い暗転

9 場

S E (学校のチャイム) 少年 1 残っている。(椅子に座っていてもよい)
少年 2、登場。少年 1、少年 2 に近づく。少年 2、ニヤニヤしている。

少年 1 あのさ。

少年 2 なんだい？

少年 1 昨日はなんか、ごめんね。気を悪くしないでくれる？

少年 2 別に、何とも思っていないよ。

少年 1 良かった。じゃあ、さよなら。

少年 2 あいつの所へ行くのか？

少年 1 いや：別に。

少年 2 もうあそこにはいないぜ。

少年 1 え？

少年 2 施設にいるのさ。僕が保健所に教えて、隔離してもらったからね！

少年 1 なんだったって！

少年 2 二度と会えないぞ。ざまーみろ！ 僕をバカにするからだ！

少年 1 ！

少年 1、すごい勢いで少年 2 につかみかかり、押し倒して殴る。

少年２の悲鳴。先生駆けつける。

先生
何してるの！ やめなさい！ 二人とも！

音楽 短い暗転。

10場

先生と少年１、椅子に座っている。先生、何か仕事をしている。

少年１
先生。

先生
落ち着いた？ 君がケンカするなんて、びっくりしちやった。

少年１
聞きたいことがあるんですけど。

先生
何？

少年１
顔を整形して人顔にすることって、できますか？

先生
何？ 突然。人顔にするって？ 誰が？

少年 1 別に、誰っていうわけじゃないんですけど…。

先生 昔、子ブタが生まれ始めた頃、親たちは子どもの顔をなおそうと必死になって、手術したり、怪しげな薬を使ったりしたんだって。人の弱みにつけ込んで嘘の薬をとんでもない値段で売りつけるなんてこともいっぱいあったって。

少年 1 そんなことがあったんですか。

先生 今は人顔にするなんて、誰も考えたりしない。逆に、人顔で生まれてくる子どもをブタ顔にする技術が進んでいるようね。まあ、顔だけなおしてもしょうがないから隔離しちゃうんだけどね。

少年 1 そうですか。（でも、あの子の顔をブタにはしたくない。あの顔のままで…）

暗転

11 場

怪しげな店。少年が入ってくる。

少年 1 ごめんください。

反応がない。

少年 1 誰かいませんか？

怪しげな老婆登場。

老婆 なんだい。何か用かい？ もしかして、お客さんかい？

少年 1 人顔になる薬があるそうですが。

老婆 なんだって？ そんな注文は、十年ぶりだねえ。子ブタが生まれだした初めの頃は、よくそんな注文を受けたもんだよ。

少年 1 あるんですね。

老婆 あるけど、高いよ。

少年 1 お金なら、ほら。

老婆 子どものくせに、どこからこんな大金持ってきたのかね。

少年 1 お母さんの残してくれたお金です。全部持ってきました。これで足りますか？

老婆 ほう……。まあ、少し足りないけど、まけといてやるよ。

ただねえ、この薬は高いだけじゃなくて、強い副作用があるんだよ。

少年 1 どんな？

老婆 それはね、人によって違うんだが、声が出なくなったり、耳が聞こえなくなったり、いろいろだ。ごく希に、何の副作用もなく人顔になった子もいたけどね。

少年 1 …。

老婆 まあ、死んだ奴はいないよ。どんなことになるうとも、こちらとしては責任を持てないって分かってもらったうえなら、売ってやるよ。

少年 1 確かに、人顔になるんですね。

老婆 なるよ。だけど、言っておくけれど、二度と、その顔には戻れないからね。それでもいいのかい？

少年 1 いいです！ 売ってください。

老婆、金を持って裏へ行き、ややあつて薬を持ち、登場。

老婆
ほら。

少年 1
ここで飲んでもいいですか？

老婆
かまわないけど、少し時間がかかるから、私は奥にいさせてもらうよ。

老婆、奥に入り、少年、薬を飲む。

少年 1
あつ、あーっ！ 顔が熱い！ 顔が燃えるみたいだ！

短い暗転。明転すると夕方になっている。老婆が少年の傍にいる。

少年 1
暗いなあ……。どれくらい経ったんだろう？ 僕は人顔になったのかな……。

老婆
鏡を見てごらん。

少年 1
どこ？ 暗くて分からないよ。もう夜なんだね。どうして明かりを点けないの？

老婆 おまえさん：目が見えないんだね。

少年 1 え？（顔をなで、人顔になったのを知るが、視力を失ったことに愕然とする）

老婆 喜びな！ 望み通りに、立派な人間様の顔になったよ！ あーははは！

暗転

12 場

S E（鍵の音など）
人顔の子どもの隔離施設。少女 1 がいる。他に人顔の子どもがいても良い。

職員 新入りだ。（声だけでもよい）

黒メガネをかけた少年 1、（職員に手を引かれて）登場。

少女 1 …あなたなの？

少年 1 ああ、ノゾミ。そうだよ。ほら。（黒メガネをはずす）君と同じ人顔になったんだよ、僕。

少女 1 ああ！　なんてことしたの！

少年 1 これで君といっしょにいられる。

少女 1 ばかね。一生出られないのよ。

少年 1 君といっしょなら、かまわないさ。

少女 1 ；あなたの新しい顔、すてきよ。；どうしたの？　（少年の目をのぞきこむ）

少年 1 見えないんだ。

少女 1 え？

少年 1 顔を変える薬の副作用で。

少女 1 ああ！　私のせいなのね、ごめんなさい！

少年 1 違うよ。君のせいじゃない。僕は何も後悔していない。ただ、君の顔が見られないのが少し悲しいだけだよ。でも、君の顔ははつきり覚えている。

少女 1 私、できることなら、あなたみたいな鼻や耳になりたいって思ってた。

少年 1 今頃分かったけど、本当は、鼻や耳の形なんて、どうでもよかったんだね。顔を見るのができない僕にとっては、誰もが同じように思える。

ブタ顔でも人顔でも人の心が変わりはない。憎しみ合うこともあるけれど、愛し合うこともできるんだ。

少女 1 あなたはみんなを外見でなく、心で見るのね。

少年 1 そう。僕は夢を見るんだ。いつの日にか、ふるさとのあの緑の丘の上で、ブタ顔の子と人顔の子が手を取り合い、兄弟のように遊べる日が来る。そんな夢を。

音楽流れる中、暗転

13 場

教室。ブタ顔の中学生たち談笑している。

生徒 2 もうすぐ中学も終わりだね。

生徒 1 来年は高校生か、制服の可愛い学校に入りたいな。最近、どこも制服変えてるでしょ。

生徒 2 やっぱ私たちの顔だと、これまでの制服じゃ合わないもんねー。

生徒 1 その前に受験勉強。

生徒 2 あーあ、それがあったか。

などと談笑する中、急に生徒 1 が苦しみ出す。

生徒 1 顔が、痛い！

生徒 1、後ろ向きになってもがいている。

生徒たち どうしたの？ ○○、しっかりして！

生徒 1、動かなくなる。

生徒たち、少女を起こすと、少女の顔がサナギになっている。

生徒たち驚く。「キヤー！」「うわっ！」など。

生徒 2 これ、何だろう？ ……息してるぞ！

生徒、二人目が苦しみ出し、一人目と同様に、顔がサナギと化す。
生徒たちパニックになる。

S E 短い暗転

先生や親が登場し、医者がサナギ化した生徒たちを診ている。

医者
これは、サナギのようだが…。

先生・母
サナギ？

医者
顔だけが、サナギになっているようです。

生徒1の様子が変わり、全員が注目する中、サナギがパツクリと割れる。すると、
生徒1は人顔になっている。

母親
○○？ ○○なの？ その顔は…。

生徒1
お母さん…。顔が、変な感じ…。

母親
○○！ 人顔になってる！

二人目の生徒もサナギが割れ、人顔になる。

医者 これは：もしかすると、ブタ顔の人間はサナギを経過して人顔になる、つまり、変態するのもかもしれない…。

先生 嫌だ、「ヘンタイ」になるんですか…。

医者 いや、その変態ではなくて。カエルとか虫とかがする、あれですよ。

先生 人が虫になるんですか？

医者 いや。虫にはならないでしょうが。どうしてこうなるのか、さっぱり分かりません。

母親 まるで別人だけど：赤ちゃんの頃の面影が目のあたりにあるわ。やっぱりこの顔が本当の人間よね！

生徒 1 お母さん。鼻や耳が軽いよ。でも、何だか変。匂いがわからなくなっちゃった！耳も良く聞こえない。

残りの生徒たち、次々苦しみます。

先生 また始まった！

医者 病院だ、病院へ連れて行け！

騒ぎの中、全員退場。（机など撤去）

14場

小学生、中学生登場。

生徒 1 あゝ私、ブタ顔の頃はあんなに可愛かったのに。何よこれ。こんなブスの人顔

になるなんて！

お母さん、言ったじゃない。きっと可愛くなるって。でも私、可愛くない！

それに比べて、○○は何？ あんな梅山豚顔だったのが、あんな可愛い人顔になるなんて。どうなってるのよ。

生徒 2 いいじゃん、私なんか、まだブタだし。変態してないの、もう、クラスで三人し

かないのに。いつまでも大人になれないみたいで嫌だブー。

生徒 1 あ、：私ブー言わなくなってる。

中学生、退場。

小学生 1 美少女コンテストなんて意味ないじゃんね。顔、まるつきり変わっちゃうんだから。

小学生 2 デビューした子も大変よね、〇〇なんか、今じゃ憎まれ役しかできないもんね。

小学生 1 十七才くらいで私たちの人生リセットされちゃうんだものね。

小学生 2 (手鏡を見て) 私、大人になったらどんな顔になるのかしら？

小学生、退場。黒メガネの少年 1 と少女 1 登場。

少年 1 みんな人顔になってしまっただね。こうなるとわかっていたら……。僕は愚かなことをしたんだろうか？

少女 1 いいえ、私幸せよ。それに、施設から出られたし、子どもが人顔でもブタ顔でも気にしないで生きられるようになった。あなたの夢はほんとうになったのよ。

少年 1 そうだね。でも……。

少女 1 心配しないで。私があなたの目の代わり。それでいいじゃない。

少年 2 登場。少女 1 それに気づき、少年 1 をかばうそぶり。

少年 2 出られたんだね。

少女 1 ええ、出られたわ、私たち。

少年 2 すまなかった。でもあの時は、ああするのが正しいことで、仕方がなかったんだ。でもどうだい、みんな人顔になってしまつて。ブタ顔を、さもすばらしいことの
ように自慢していた自分がバカみたいだ。

だけど、どうして僕は変態でできないんだ！

それに、僕には、君のように薬を飲んで人顔になる勇氣もないんだ！

少年 1 君もつらい思いをしたんだね。みんなが運命にふりまわされていたんだよ。君が特に悪い人間だというわけじゃない。もう、何とも思っていないよ。

少女 1 私も。

少年 2 …ありがとう。

高校生が登場。

高校生 1 しばらくー。写メで見たけど、ずいぶん変わったねー。

高校生 2 そっちこそすっごくかわいくなったじゃない。

高校生 1 なんかさ、「かわいい」って感覚、違ってきてない？

高校生 2 そうそう、「かわいいブタ」と「かわいい人間」じゃ、ずいぶん違うからねー。
前はさ、「かわいい匂いー」とか感じてたよね。

高校生 1 ほんとそれなくなったしー、男の趣味も変わっちゃったよねー。

大人登場。

大人 1 何が「新人類」よ。中学卒業するくらいになるとみーんなサナギになって、結局人顔になっちゃうんじゃない。

大人 2 うちの子、変態したら父親そっくり！ あんなにかわいい顔してたのに、もうがっかり。

大人 1 やっぱ人間の子は人間に決まってるのよ。

大人 2 所詮、ブタはブタよねー。

話に夢中で少年 1 にぶつかってしまいが、気にもしない様子。少年 1 が盲目である
とわかると、さも嫌なものを見るようなそぶりをする。

大人 1 (少年 2 を見て) ちょっと、ほら、見て見て、あれ。

大人 2 まあ、あの歳でまだブタ顔だなんて、おかしいわねー。

大人 1 何時までもブタ顔って、やっぱり食生活とか影響するのかしら？ 豚肉の食べ過
ぎってことないかしら。家はほら、牛肉だからー。

大人 2 魚でしょーやっぱ。ドコサヘキサエン酸がいいんじゃない。

少年 2、大人に近づく。

少年 2 確かに、僕はブタのままですよ。でもね、今では一生この顔でもいいって思っ
てるんです。ただ、この心の痛みと人の優しさは忘れないつもりです。それを失く
したら、ただのブタだから。

少年 2、少年 1、少女 1 退場。

高校生 1 おばさんたち。

大人 1 2 え？

高校生 2 いいかげんにしてよね。

大人 1 2 何？

高校生 1 あんたたち、自分がブタだったり人だったりしたこと、ないでしょ？

大人 1 あるわけじゃない。

高校生 2 私たち、赤ちゃんの頃、ブタって言われて石ぶつけられた。でも、だんだん、ブタが普通になって来たら、「新人類」っておだてられた。

高校生 1 人顔の子どもを「旧人類」って言って、石ぶつけた。

高校生 2 でもみんな変態して人顔になるって分かったら、こんどは変態できない子をバカにする。

高校生 1 あんたたちみたいな大人が、一番、「旧人類」なんじゃない？

大人 2 何言ってるのこの子たち。私たち旧人類に決まってるじゃない。ねー。わけ分かんないこと言わないでよ。（そそくさと退場）

高校生 2 やれやれ、ああいうお婆さんは、何があっても絶滅しないんだよね。

高校生 1 まったくだ。

ブタ教団の指導者が通りかかる。それを見つけた高校生たち、指導者を囲む。

高校生 2 おい、待てよ。あんた、「新しい神」とか、「新人類」とか言ってたよね。どうなの？ あんたの神も変態して人顔になるの？

指導者 ああ変わるとも。変わったっていいじゃないか。毛虫が蝶々になるんだよ！ それに比べたら、ブタから人になるのなんか、かわいいものじゃないか。そ

逃げ出す指導者。

高校生 2 ほんとうだ。ブタの神様も大忙しのようだ。

子ブタたち登場。高校生、無心に遊ぶ子ブタたちを眺めながら。（次の高校生の台詞は、一人で言っても、複数に分けて言っても、どちらでもよい）

高校生

子ブタだった時代が懐かしいわ。まるで別世界に生きていたみたい。

でも、確かに私はブタだったし、それを何とも感じないで生きていた。

今、人顔になって初めて、あの時代が何のためにあったのか分かる。

この子たちも、やがてそれを知る。

世界がみんな、そういう経験をした大人だけになったら、その時こそ…。

子ブタ 1

ねえ、私も、お姉ちゃんみたいになるの？

高校生 2

なるよ。きつときれいな人顔になるよ。

子ブタ 2

アハハ、早くならないかなー。

子ブタ 3

早く大人になりたいブー。

高校生 1

あわてなくてもいいよ。今は子どもを楽しんで、ゆっくり大人になりなさい。

子ブタ

ゆっくりブー。

高校生 1 踊ろう！ みんなで。

全員 （高らかに）ブー！

人顔の高校生とブタ顔の子ども、いっしょに「五ひきのこぶたとチャールストン」を踊る。
踊る中、幕。

あらすじ

ある日突然、人間の赤ちゃんが、皆、ブタ顔で生まれるようになる。親たちはびっくり、慌てるが、健康に問題はなく、みんながそうなので一応安心して(?)育てるようになる。やがて赤ちゃんは育って、幼稚園、小学校と進んで行く。先生は初めての経験でおたおたする。

「ブーブーうるさいぞ!」「先生、ブタを差別しないでください。」「ブタですが何か?」

鼻や耳のきく子ブタたちに大人達の反応はさまざま。明らかにこれまでの子供たちとは違っているので、対応に困惑する親や教師たち。

子供たちは新人類なのか? 人間はこのままブタ顔に「進化」してしまうのか?

子ブタたちの踊る「5匹のこぶたとチャールストン」

「新人類だ!」と持ち上げる者、ブタ顔を得意がる者と、嫌がる者。人間になりたいと望む者…。「かわいい子ブタコンテスト」で優勝する子。「かわいくない」ブタ顔で悩む子。整形手術や、あやしげな薬(顔を変えられるという)が流行り、だまされる者も出て来る。

人類の危機と感じた者たちは、過激な狂信的教団を作り、ブタ顔の子供たちを襲う。「神は自分のお姿に似せて人をお作りになったのだ。断じてブタではない!」ある少年を襲う教団員。そこを自分が犠牲になって救う人顔の女性(母?)。

しかし、中にはブタ顔でない、人顔の赤ちゃんもわずかに生まれていた。彼らは次第に作り物のブタ鼻やブタ耳をつけ、隠れ住むようになる。ブタ顔の少年と人顔の少女の悲恋物語…。自分のブタ顔をいかがわしい薬で人顔に変えた少年。少女の反応は…。

やがて、中学生～高校生くらいの年齢になると、子供たちは自然に「変態」して、人顔になることが分かった!(ブタ顔が脱皮する。顔がサナギ化しても良い)次々と生まれてくるブタ顔の赤ちゃんと、変態して人顔になる中高生達。

子ブタたちは思う。「大人になったら、どんな人顔になるのかしら? 『かわいいブタ』と、『かわいい人間』じゃ、随分と違うから、想像もできないわ。」

「シンデレラ=醜いアヒルの子」状態の子の例。それとは反対に「かわいい子ブタ」だった子が「かわいくない少女」になる例。人顔になって落胆する者、安心する者…。子ブタたちは将来の変態を大きな期待と不安を持って待っている。

「お母さん言ったじゃない。きっとかわいくなるって。でも私、かわいくない!」

希に、ブタ顔のままで変態しない子もあり、変態を促す方法を探る人たち。

しかし、顔がどう変わろうとも、変わらない心というものがあるのではないか。ブタでも人でも何の違和感もなく接することができたら…。ある子ブタ(かつての悲恋の少年)の叫び。「私には夢がある! いつの日にか、故郷のあの緑色の丘の上で、ブタ顔の少年と人顔の少女が、何の偏見も差別もなく、友達としていっしょに遊べる日がくる夢が。」

大人に(人顔に)なったかつての子ブタたちは、今の子ブタたちを見て感慨に浸る。

「子ブタだった時代が懐かしいわ。まるで別世界に生きていたみたい。でも、確かに私はブタだったし、それを何とも感じないで生きていた。今、人顔になって初めて、あの時代が何のためにあったのかが分かる。この子達もやがてそれを知る。世界がみんなそういう経験をした大人達だけになったら、その時こそ本当に平等で平和な世界が実現するのか

も知れない。」

高校生（人顔）と子ども（ブタ顔）はいっしょに「5匹のこぶたとチャールストン」を踊る。